

日本人人口論小史(II)

三〇

社会有機体説、社会ダーウィニズムの日本イデオロギー化〔1〕

市原亮平

はじめにお断りしておきたいのは日本人人口論小史の予定計画が漸次拡充され、日本イデオロギーはもちろん一般人口論や社会学にまで容喙するという潜越をおかしたことである。だがこのことは筆者の脳裡においては潜越でも何でもなく、本来特殊具体論としての日本人人口論を扱えばあい豫件的に前提されていなければならぬ一般普遍論としての人口論が体系的に構築されていないことにもとづくのである。それは主として筆者自身の浅学のゆえであるが、さらに依拠しなければならぬ日本におけるマルサス研究の立ちおくれ、とくに人口論におけるマルサス(経済学原理におけるマルサスとの内的連関における)研究の現段階的水準の制約も正直にいつて認めなければならぬのではなからうか。わたくしは、いくたびか視角を一般普遍界に拡充しなければならぬ苦慮におちこみ、日本経済学やマルサシズム、ダーウィニズム等の一般社会理論に迄下降しなければ日本人人口論自体に上降しえない破目においこまれたのである。このことは是非ひろく日本イデオロギー論や日本経済学について基礎観点が定置されていないと、日本人人口論の解析自体が不可能であるという、日本人人口論の現段階的制約のわたくしにおける反映でもある。かくて一般抽象界と特殊具体界とをいくたびか往復し前掲(Ⅰ)にひきつづきながら論点を拡散してみたり基礎観点を移動彷徨させてみたりしながら自らの人口論の不整合を曝露したのが小稿である。わたくしが日本人人口論以上に一般人口論やイデオロギー論に論及しているのも右のような事情によるもので寛恕ねがいたい。日本イデオロギーや文化形態論、日本経済学論についての学界における業績は従

来不幸にして乏しく、その上に架せられた未熟な構築であるからには筆者の未定見がいたるところ露呈されていないか、とおそれながら、忌憚のない御批判を賜はるよう先学にお願ひしておく次第である。

日本人口論小史(Ⅱ)

社会有機体説、社会ダーウィニズムの日本イデオロギー化。

[1] 有機体説、社会ダーウィニズムと自然法の日本的形態。

(一) マルサシズムと社会有機体、社会ダーウィニズム説。

(二) 日本における自然法と社会有機体思想、民権論と国権論。

本号掲載

[2] 日露戦争と日本人口論。

(一) 日露開戦論と日本第一人口論

(二) 非戦論と日本第一人口論批判

本号掲載

[3] 日本才二人口論——社会主義の屈折。

(一) 日本第二人口論↓社会主義理論の社会ダーウィニズム的屈折。

(二) 日本第三——中間派人口論↓「純正」社会主義理論の社会ダーウィニズム的屈折。

(一) マルサシズムと社会有機体、社会ダーウィニズム説

マルサスの人口論が色食両慾に牽連して俗耳にはいりやすく、滔々として通俗の一途をたどつたのと同様に、社会対個人の人類本然の矛盾・葛藤なる観念像として俗耳にはいつた社会有機体説、社会ダーウィニズムのイデオロギー的効力もまたマルサシズムといちじるしく近似した性格をもっており、わたくしは両者の関係をイデオロギー的「共軛関係」konjunctivitätとしてとらえたいとおもう。——市民社会固有の機構的矛盾を人口と食料との増加

比の落差という自然的矛盾に解消するマルサシズムと、個人対社会の人類史的な永劫矛盾に還元する社会有機体説との方法的二元性、そのイデオロギー的倒錯観念形態性、さらに両者のダーウイニズムを触媒とする移入観念性において。

こゝでやゝくわしく、マルサシズムと社会有機的説、社会ダーウイニズムのイデオロギー的共軛関係とダーウイニズムを触媒とする先後的移入観念関係について、考察しておくのが便利であろう。筆者が以下に漸次定置する筈の基礎観点が敷衍されるからである。

日本人口論ではじめてマルサスと進化説との交渉を扱った鶴城居士の纂訳になる『経済学者列伝』『トーマス、ロバート、マルサス氏』(東京経済雑誌明治二十二年六月二二日と同年七月六日の連載)は「又た近年理学社会を併呑せんとする勢ある、夫の進化説の如きも亦た大に『マルサス論』と関係ありと思惟せられ、進化説は『マルサス論』に重きを置き『マルサス論』は進化説の爲めに大に發揮せられたり、左れば夫の有名なる博物学者アガシス氏は進化説を称して『マルサス論』の焼直しなりと謂ひ、又はダルウイン氏は生存競争即ち進化主義は『マルサス』論を全動植物界に応用したるものなりと称せり」と述べているが、このことに関しては当のダーウイン自身『種の起源』の諸言で「……その次の章では、世界中のあらゆる生物の間に、其等が真に幾何級数率を以て増殖する結果として避くべからざるものである、『生存斗争』について考究する。これは動物界全般へあてはめられたマルサス説である。」⁽¹⁾といい、さらに「生存斗争」を扱った第三章の「増数の幾何級数的比率」という一節で「生存斗争は、生物が増加する傾向が高率であることの不可避的結果である。……生存することの可能である以上に多数の個体が生産されるので、いつも同一種の一個体と他の個体との間、或は別の種の個体との間、或はまた生活の物理的諸制約との間に、生存のための斗争がなされなければならない。これは全動植物界に数倍の力を以てあてはめられたマルサス説である」と述べているところである。別に近代進化学説の確立者であるマルサス、ウオーレスとともに自叙伝中で「進化説の著作中にはまづたく触れられていないが、マルサス人口論から進化説の基本概念である「生存斗争」「自然淘汰」の着想をうけたといつて⁽²⁾いる。この⁽⁴⁾

ことは、マルサシズムが近代進化論やダーウイニズムの基礎であり不可欠な前提条件であつたこと、したがつて両者が論理的にもイデオロギ的にも密接な「共軌関係」に置かれたことを意味するのさうでないことは生物学史的に一瞥してあきらかであつて、ダーウインの時代にいたる僅々五、六十年間に生物学が一定方向に異常な發展をとげ、一方解剖学的研究においても一段の躍進をしめし——これらを基礎づけるものとしてイギリス農業資本主義の三分化——農業資本家、農業労働者、地主的分化それにもとづく典型的な資本主義的農業實踐があつたことはいうまでもない——、ダーウイン、ウオーレスが進化論をうみだす生物学史上の必然性は充分に成熟していたのであつて、だからこそウオーレスは謙仰にも、マルサスと自分は充分にできあがつていたマツチをただ擦りあわせたにすぎない、とかたつたのである。誤解をおそれ念のために加茂儀一氏の筆を借ると「……その後細胞説の發展と同時に細胞の内容である所の原形質がシユルツエヤモールによつて始めて明らかに規定されるに及んで、組織学は広大なる研究範囲を見出す様になつた。これと同時に十九世紀前半頃に盛んになつていた前史時代研究によつて、殊に歐洲の水辺械杵居生活跡の發見と共に時間的に見て現在よりも遙かに過去に存在している時期の家畜資料が手に入れられ、その当時の家畜種の組成が明らかにされると同時に、その野生の原始型に遡り、或いは現在の家畜種迄系統を追い求めることが可能とされることによつて有機的形態の変形可能性の正しいということが、漸次認識されかけようとしていた。斯くダーウインの時代に至る僅か五、六十年間に生物学史は一つの方向に異常の進歩を遂げ……ダーウインの進化論を生み出す土台は既に出来上りつゝあつたのである。只進化論という当時の状態としては宗教的見地から見ても異端視される恐れのあるこの理論を大胆に發表することの出来る場所のみが問題として残されていたと云つてよい。そしてそれに最も相応しい土地はさし詰め英國であつた。其處では既に産業革命も成就され、新興市民階級は躍進の頂上にあつた、そして其處は新らしき思想を植へつけるに最も適當した土地になつていた。かゝる土地にダーウインが登場したのである。そしてかゝる土台に於てのみダーウインの存在は可能であつた」のである。つまり自律的な生物学史の必然的な發展にさいし、マルサシズムが触媒、觀念として作用したのである。原光雄氏は「自然科学史」と「自然の歴史」とはいちおう別で、前者は後者を直接的には反映せず、むしろ社会史の一部として自然弁証

法や技術的基礎の制約以上に支配的な世界観、支配的な思维方法に影響されること、自然科学史の必然的發展は社会弁証法的偶然性をつらぬいて自己をしめすこと、を指摘されるが、一方戶坂潤氏も、自然科学的反省以前の常識的に統一をもつた世界意識——歴史的産物でイデオロギーの性格をもつ——を「第一次の世界観」とよび、これが諸々の科学的方法の発見に側面から有力な条件をあたえることを述べ、その適例としてマルサス人口論とターウインの「自然淘汰」観念との媒介関係、さらにオエルステットの電磁気関係の研究がジェリシグのロマン派的自然哲学に負うところがあつたこと、をあげておられる。⁽⁸⁾自然淘汰の概念の確立に有力な条件を提供した原氏のいう「唯物史観的規定性」、戸坂氏のいう「第一次の世界観」は何であるうか、そしてそれがどのような形でマルサス人口論に投影されていたのか、これこそマルサシズムとターウイニズムの眞の相関関係を解きあかすことである。当時の支配的なブルジョアジーの世界観、思维方法はいうまでもなくベンサミズムであり、それは商品流通者の意識にのぼつたブルジョアの倒錯——生産における本質矛盾をみずに流通過程における平等・自由・功利の表象を謳歌するところの——であつて、⁽⁹⁾ゴドウインの無政府主義を裏付けた自然法にたいする仮借ない挑戦、快楽 Pleasure 苦痛 Pain に駆動されながらひたすら快楽を追求する消費者の主観主義にその端的な表現をみるのである。流通過程に視角をすえた消費者の個人の功利的斗争観、これこそ産業資本の確立によつて自己満足したマンチエスター資本のホッブスのな「万人の万人に対する斗争」の流通観念的な再現であつたのであり、陰鬱なる経済学者マルサスの価値論における流通主義や「彼の友(リカードウ)が主として交換される商品を考察しているときに、マルサスは交易者の人々を忘れずに、その上、彼等の意欲を研究し彼等の動機を洞察する」(テュルジオン)といわれる——レントナーのイデオログ、オーストリア学派の先駆としての——消費者の主観主義、さらにはゴドウインの自然法思想にたいする敵視等とを考えると、ベンサムとマルサスの基礎視点的類似性、思维方法の共軌性はあきらかである。だが第一次の世界観なり支配的的思维方法の問題は諒解されるとしても、具体的にマルサス人口論と自然淘汰観念との交渉について、「マルサス人口論にはホッブスのな『万人の万人に対する斗争』の思想は強くあらわれていないように思われる。すくなくとも顯著ではない。『生存斗争』という言葉は一箇所に出てくるが、それは個人間に行われるものでなく、異民族

間のものである。個人間の競争ないし斗争が主題となつてゐる個所はまつたくない。⁽¹¹⁾との疑問について、われわれはいかに答へるべきであるのか。事実、マルサス人口論中において「生存斗争」struggle for existence なる表現が使用されているのは、人口論の歴史篇のうち、ローマ没落史をめぐる北欧諸民族の大移動をとりあつた一章（第一篇第六章）中の次の一文にとどまる。——「かゝる強大なる活動の動機の下に馳駆する連中の「絶対的、過剰人口のため移住を余儀なくされる牧畜民のこと——市原」の気力には、年久しく定着し商業農業の如き平和なる職業に従事する住民は、しばしば抵抗することができないのである。また同一の境涯にある他種族との頻々たる斗争は、ひつきよう、『生存斗争』であつて、敗北の報いは死であり勝利の褒賞は活なる所以が深く脳裡に刻み込まれるから、勢い死物狂いの戦を演出せざるを得ない。」⁽¹²⁾とところで各民族間の移動や対立を捨象して普遍的人類世界について牽出せしめられた人口原理——人口増殖の受動的否定的役割の重視——がその歴史記述篇で各民族間の移動や斗争史に適用されてくると、マルサス自身が内在せしめてゐる民族主義とも関連して、人口膨脹に優位をみとめる、いわゆる人口史観が帰結されてくることは後説のごとくであつて、こゝにおいては食糧と人口の自然増殖率の問題よりも、より強くそれを動因とする民族の「生活空間」「場所と食物との不足」にもとづく民族相互間の運命的な斗争観が導出されてゐるのである。すなわち「生活空間」の狭隘を動力とする民族間の頻々たる生存斗争の結果たる窮迫↓戦争↓窮迫の「波動」oscillation 的な永却、回帰が帰結されており、こゝにおいては個々の万民主義的個人ではなく、強固な「民族体」 Volk を主体とする「生存斗争」観があらわになつてゐるのである。事実、ウオーレンスは自らの生存斗争の着想に関係のあつた人口論中の章節として、とくに未開種族における「自然的障害」natural check のみじめな事実の記事、わけて第一篇の第四章と第八章、すなわち「アメリカ・インディアンの間における人口にたいする障害について」と「アメリカ各地における人口にたいする障害について」のうちから若干の節（第四章、原本第六版三五—三七頁、三九頁、一五八—一六四頁）を指示しており、これらの個所はホップスのいう「万人の万人に対する斗い」を運命的な諸民族の諸民族にたいする生存斗争観として、ベンサミズムを基礎視点とする「波動」的民衆斗争観として展開し、民族主義的な人口史観を含蓄せしめてゐるのである。⁽¹⁴⁾そのかぎり「第一次の世界観」「支配的な思维方法」

としてのベンサミズムは「民族体」相互間の功利的斗争観としてマルサス人口論中の歴史記述篇中において余蘊なく含蓄されていたのである。かくしてマルサス人口論はベンサミズムの旗手としてのみ、ダーウインとウオーレスに生物学史的に必然に熟しつつあつた進化説の核心概念——「生存斗争」概念を着想せしめたのであつた。

ところで右のようにマルサシズムは支配的世界観たるベンサミズムの旗手としてのみダーウイニズムに移入観念することができたが、こゝに確立した近代生物学の諸概念、とくに適者生存、生存斗争の概念は「一つの証明済みの科学上の仮説という權威の衣をきせて、ふたたび人類史のなかにもちこまれたのである」⁽¹⁵⁾。ホブソンはこの「生物学の諸概念が社会学の先駆者たちを魅了した力強い把握」を指示するとともに、「粗雑な生物学的社会学の最下位の謬見」や「生物学的社会学派の短見」を帝国主義の科学的弁護論として指摘したが、十九世紀市民社会の階級分裂の深刻化、危機化のうちに生れてきた社会学はいづれも第一に生物有機体と社会との類推が比喩的にあるいは説明の手段として用いられ、かえつて社会有機体の生物有機体にたいする優越の根拠とされている、第二に生物進化に相当する社会進化の概念がその理論体系の核心の一をなしている、——以上二点に依拠しつつ市民社会の構造的矛盾の仮象的反映である個人対社会の運命的対立観の解決策として、個人にたいする連带的有機的社会の全体主義的優越性を帰結し、こゝに社会有機体としてのみ生誕し得たのである。すなわち社会学の創建者コントは社会の特徵について、「生物有機体の優越性は各種の器官がますます分化し、しかも連帯するにしたがつて各種の機能がますます専門的になるといふ点にある。社会組織の特徴もまた同様でこの専門化こそ個人組織よりもすぐれる点である。」かくて生物有機体に類比さるべき全体社会をコントは「社会有機体」*l'organisme social* あるいは「集合的有機体」*l'organisme collectif* と命名した。いま一人の社会学の創建者スペンサーも次のごとくいう、「社会は生物有機体の生れ、生活し、死するところの根本原理にしたがつて、生れ、生活し、死するのである」⁽¹⁷⁾と。このように社会有機体説、その帝国主義段階における発展形態である社会ダーウイニズムは——とくに激化した国内階級対立の隠蔽と国際帝国主義戦争合理化のための放恣な「適者生存」「生存斗争」概念の濫用をみよ——は、近代進化論とくにダーウイニズムの自然科学範疇を媒介にして移入観念的な前後関係に立つてお

り、両者は異なつた市民社会の階級斗争階梯で生れおちながらも社会↓自然↓社会なる範疇領域にわたつて移入觀念されたという以上の意味において、戸坂氏のいう「共軛關係」を認めざるをえない。そして社会有機體説、社会ダーウイニズムとマルサシズムとのイデオロギー的「共軛性」——ダーウイニズムを媒介とする——は、市民社会の基本矛盾を倒錯させ、個人対社会の永遠の相下の矛盾、あるいは人口と食料との自然増殖率の宿命的矛盾に還元しさるという方法論の同一性や自然權思想にたいする徹底的な挑戦——スペンサーは「政治犯や狂信的革命家は現存社会制度の下における不幸に氣をとられてゐるが、これ等の不幸が人間の邪惡からきてゐることを思いつかず、唯それが社会制度に由来するものと考へてゐる」と述べ、ロンドン街上を彷徨する貧民をみて「彼等は無用のものだ」と叫び、マルサスは社会变革を石竹やカーネシオンをキャベジ大にする実験と同視し、さらに人口論第二版で「すでに占有濟みとなつてゐる世に生れてきた人間は、扶養の義務のある彼の両親から生計をたてゝもらうことができぬならば、そして社会が彼の労働を必要としないならば、どんなに少量の食糧にたいしても權利を主張することはできぬ、事実そこにいる用のないものである。自然の大饗宴に彼の座るべき座席がないのである。自然は彼に去れと命じる……。」という——をみれば、ますます首肯しうるものとなるだろう。ところで両者のイデオロギー的「共軛性」性や移入觀念の前後關係をいうばあい、上來重ねて強調してきたことであるが、それはなんら論理的、「共軛性」を意味しませんでしたダーウイニズム——両者の触媒となつた——の生物学説史上における反動的地位を帰結せしめることにもならない。自然と社会とが連鎖的過程的に統一されつゝも両域においては嚴として別個の法則性と別種の論理構造とが支配してゐる以上、反動的社會イデオロギーが自然科學領域内で触媒觀念されたとしても、そこでは自ら別個の・自律的な自然科學的法則性の内部においてのみ作用し得るのであり、いちおう外在的な・イデオロギー的功罪のみをもつて律することはできず、たとえば前記したように反動的ロマン派哲学がオエルステットの電磁氣研究に貢獻的役割をはたしてゐるのである。かくて「唯物史觀的規定性」や「第一次の世界觀」の制約性を認めるとしても、右のごとき懸案はあくまでも自律客觀的な自然科學史上において評價基準をたげなければならぬのは当然のことである。したがつて、ダーウイニズムにおけるマルサシズムのイデオロギー的影響のため、ダーウインが生存斗争説

の過大評価、ベンサミズムによつて裏付けられた自然にける飛躍的論理の不承認等々の欠陥におちいつたことをいうばあい、あく迄も生物学的な必然性と唯物史観規定性的な偶然性との相互弁証法的連関においていわれるのでなければならぬ。さらにわれわれはダーウイニズムとマルサシズムとの観念的触媒関係——人口論中の人口原理の歴史実証篇におけるベンサミズム的民族斗争観の移入観念作用——についてはすでに述べたとおりであるが、さらに一步進んでマルサシズムの民族斗争観がダーウインの同種の個体間の生存斗争というダーウイニズムの中心思想とどのように交渉したか、を検討し両者の共軌関係についての認識をさらに深める要がある。けだし「ルイセンコは生物社会における種内の関係と種間の関係をあらためてとりあげ、同種の個体間の生存のための斗争というマルサシの理論を事実によつて否定した⁽²⁰⁾」といわれるが、マルサシは同種個体間の生存斗争なる命題をどこにおいて述べているかという疑問が生じるからである。巨細にみると、ダーウインの同種内個体間の斗争重視はもつぱら当時の生物学史上における事情に制約されているのであつて、マルサシズムのイデオロギー的影響に左右されたとは思えない。事実社会法則に機械的に飛躍せしめられた自然法則としてのマルサシ人口論——全体の有機的連関から切断された生物数と食物との間の生物的原理を導出するマルサシの孤立的静的方法は、全有機界の外的自然と全生物との動的相関々係を全体的に把握したダーウインの動的全体的方法とはまったく無縁なものであつて、マルサシの自然的人口原理が人口と食物との生物的二契機の外に生活水準なる社会的契機を不意不識に投入してそのまゝ飛躍、仮構されたいわゆる「社会的人口三位の原理」⁽²²⁾においては、人口にたいする食物の窮局的規制力が強調されていること周知のごとくである。この社会的人口原理が歴史実証篇で具体的な民族移動や民族斗争史に適用せしめられたとき、はじめて民族主義的な民族集団間の「場所と食物の不足」一言にしていえば「生活空間」の狭隘を動因とする「波動」的な運命的斗争観が帰結されてくること後述のごとくであつて(この歴史記述篇からこそウォーレスが「生存斗争」概念を着想したことはすべてに述べた)、ダーウインにしてもウォーレスにしてもこゝにはじめて、社会における民族単位、斗争観から、単位民族、生物個体、を類似して自然における同種内における個体相互間の生存斗争観へと帰納することができたといえよう。マルサシズムがもつ民族単位、運命的斗争観はやはり社会ダーウイニズムとイデオロギ

一的に共軛しており、ダーウイニズムの同種内個体生存斗争観と結びつけるのは妥当ではなかつたのである。

以上でマルサシズムがダーウイニズムを媒介としながらもダーウイニズムとではなく、社会ダーウイニズム、社会有機体説とこそイデオロギー的共軛関係に置かれることをあきらかにしえたと信するが、最後にマルサスがベンサム哲学に裏付けられた万民主義的個人主義の方法論——周知のごとく——に基脚していたこと、彼の内在せしめていた・社会有機体説と共軛する前述したような民族主義的反自然法的姿勢とは本来矛盾しあはないか、という疑問について、一言私見の傍証をくわえて答解にかえておこう。(——細説は別稿に譲るとしても)。国家有機体説の祖国ドイツの歴史学派がひとしく、万民主義的個人主義の祖国イギリスの自由主義経済学者中からとくにマルサスだけを拾いだして自らの有機体説的甲羅をマルサスにもみだし、とくにリカードウとの対比においてマルサス礼讃の辞を吝んでいないことは注目にあたいしよう。すなわち、アドルフ・ヘルトはリカードウがその抽象的個人主義的理論において資本の利益を徹底的に擁護したのにたいし、マルサスは「いつそう思想豊かで且つ偏見のない」経済学者であること、ゆえに、マルサスはリカードウのように「国家観念」を喪うことなく「心なきマンチエスタートウム」に組みせず、「倫理的で政治的な視点」が重要な意義をもつていたと賞讃⁽²³⁾し、ハスバツハはマルサスをリカードウと対立させこれによつて「古典派の同一性のお伽話」を打ち破りマルサスを自己の陣営に奪還しえたと考へたのである。一時代まえにステュアート^{エリット}で為政者 *statesman* という賢良に予託された政治体の統制がスミスの「自由放任」でひつくりかえつたのが、ふたたびマルサスによつて当時の自由主義経済学者ではめづらしく政府干渉の容認となつてあらわれたことも指摘しておこう。⁽²⁵⁾

十七、十八世紀の市民社会の成立を支えた斗争の市民科学たる古典派経済学の基礎視点となつた社会思想——自然法は、聖トーマスの前期的社会有機体説にたいする、別言すれば封建的勢力にたいする独立小生産者(絶対主義的封建的規制の割れ目から抬頭した)の斗争イデオロギーであつたのであるが、その後産業資本の確立と生産者的中産層の両極分解化、さらに近代的階級斗争の脅威的形勢化は、資本論の著者をして「ブルジョアジ」はイギリスおよびフランスではすでに政治的権力を奪取した。その時以来、階級斗争が、実践的および理論的に、ますます公然かつ

威嚇的な諸形態をとつた。それは科学的ブルジョア経済学の葬鐘を鳴らした。いまや問題なのは、もはや、この定理が正しいかあの定理が正しいかということではなくて、それが資本にとつて有益か有害か、好都合か不都合かということ、警察の忌諱にふれるか否かということであつた。……大陸における一八四八年の革命はイギリスにも反応があつた。なお科学的意義を要求せる、そして支配階級のたんなる詭弁学者・阿諛者以上のものたらんと欲した人々は、資本の経済学をば、プロレタリアートの今やもう無視すべからざる諸要求と調和しようと試みた。かくして、ジョン・ステュアート・ミルによつてもつともよく代表されているような、生気のない折衷論が生じた⁽²⁷⁾と筆致させたように、市民経済学の俗流的退化を着々と進行せしめていつたのであつて、市民経済科学から科学性を剝奪したところの基礎条件は同時に経済科学の予件を社会学の対象圏内に委託した生気なき折衷主義者ミルとともにイギリス社会学の創成者たるかのスペンサーをもうみだしていくのである。

ミルが経済科学にたいする社会学優先の論理構造をいだいており(彼のコントにたいする敬仰をみよ)、彼によつてはじめて経済学は国民性と社会状態とを前提にしたうえて成立する仮設的理論なりとのドグマに立つて与件の変動把握をもつばら社会学の領域にゆだね市民経済学の顛落形態——社会学と経済学との概念論的折衷的体系が成立したことは周知のとおりである。ところでミルの社会学との折衷経済学やスペンサーの社会学を生みだした事情についてはフライヤーも「古典派社会学はある危機がうまれ、この危機を克服するために社会学が要請せられたのである」と述べているが、⁽²⁸⁾「ある危機」は「古典派社会学」にどのような刻印を押したのか。スペンサーは社会主義を「せまりくる奴隸制」と呼び、人類社会にも無慈悲な優勝劣敗の法則を適用し、既述のようにロンドンの街上を彷徨する貧民をみて「彼等は無用のものだ」と呼び「苦しい生活をしている人々の不規律を憐憫の眼でみるものゝそれは決して無用のものを許容している訳ではない」と断言しているのである。⁽²⁹⁾コントについてはどうか。プリントはいう、「かくして二つの対立抗争する思想の流れが彼の心の中に衝突し混合して、彼の知的生活面で固有なときがた

い矛盾をつくりだした。彼は個人主義、自由主義を増悪し、私的判断、人間の平等および人間主権のごとき『人權』を憎んだ。彼の同情は革命よりも反動に存した⁽³⁰⁾と。コントにあつてもまた社会は個人に優越する有機体であり、なによりも十八世紀の「革命の精神」（それは抽象的な「形而上学的段階」の最高の發展である）への對抗に出發し、ついで市民社会秩序にたいする挑戦者、とくにブルジョアジーに對戦しなければならなくなつてゐた新興勢力の一つたるサンキュロット一派にたいし敵對してゐたのである。

以上述べてきたように古典的市民社会、なかんづくイギリスにおける自然法思想と前期的ブルジョア的有機体思想との相互背反関係はあきらかであるが、世界資本主義に圍繞されたまま開国を迫られ、半封建的絶対主義が顛倒的農奴主的形態でもつて資本主義をにわか扶植しなければならなかつた日本のばあい、移植入自然法・有機体思想はどのように後進国のパターンを刻印せしめたか、前稿との重複をいとはず若干述べてみたい。——既述したように、自然法思想と有機体思想との対立、葛藤はここ日本の風土上においては民権論と国権論との相克としてあらわれねばならなかつたのであるが、国権論したがつて社会有機体説の民権論・自然法にたいする圧倒的な優越性と日本の条件における比類のない繁茂とをいま一度検出して、沿々と朝野に盛行し滲透していつた有機体思想・社会ダーウィニズムがふたたび日露戦争時に第二の大日本膨脹論としてうちだされること、しかも非戦反戦主義の核心となつた日本社会主義もその理論形成にさいして日本イデオロギーの支配的部分と化した社会有機体思想、社会ダーウィニズムのため多くの屈折を余儀なくされたことを、次に敷衍しなければならないのである。

註(1)日本人口論におけるマルサス説の圧倒的影響とその俗流的大衆化とについては別稿において触れたとおりである。ただしこれは日本の特殊性をふくみながらも日本の孤立現象ではないこともちろんで、念のためにヘンリー・ジョージ「進歩と貧

困」(*Progress and Poverty, 1879*) 中の一章から引いておこう。——「マルサス説は知識界において、何らかの形でほとんど普遍的な確認をうけており、現代の最良の書物においても、最も通俗の書物においても、この学説がいたるところ姿を現わしているからである。経済学者も政治家も、歴史家も、自然科学者も、また社会科学者学会も、労働組合も、宗教家も、唯物論者も最も厳格な保守派の人も急進派中の最急進派の人もすべてがこの学説を確証している。マルサスの名を聞いたこともなく、彼の理論を少しも知らぬ多くの人々が、この学説を信奉し、習慣的にこの学説から色々の推論をしている。」(長洲一二訳、日本評論社版一二八頁)。

- (2) 吉田秀夫「日本人口論の史的研究」七四頁。
- (3) 小泉丹訳、岩波文庫版、二二六頁
- (4) 同上・八二頁。および A. R. Wallace: *My Life, A Record of Events and Opinions, 1908.*
- (5) *The Darwin-Wallace Celebration held on Thursday, 1st July, 1908, by the Linnean Society of London.* 小泉丹「マルサスとダーウィン及び社会ダーウィニズム」小樽高商編百年忌マルサス研究三八七頁。
- (6) 加茂儀一「進化論」三木清編、哲学辞典所収二五頁。
- (7) 原光雄「自然科学史と自然弁証法」思想一九四七年七月号四六五頁以下。
- (8) 戸坂潤「科学論」(上)選集第一卷二〇八頁。
- (9) 出口勇藏編「経済学史」二〇五頁。
- (10) 遊部久藏「マルサスの流通主義について」経済研究第六卷第一号所収参照。
- (11) 八杉竜一「近代進化思想史」九一頁。
- (12) 人口論第六版寺尾訳二二九頁。
- (13) 小泉丹「マルサスとダーウィン及び社会ダーウィニズム」前掲書所収三七九頁。
- (14) マルサスによつてにわかに圧倒的支配力をもつにいたつた「近代人口論」(吉田秀夫「イタリア人口論研究」参照)はイタリア人口論者ポテロによつていちはやく説かれていたもので、その歴史解釈たる「人口史観」(吉田秀夫「経済学説研究」)または「食物史観」(南亮三郎「人口理論と人口問題」)はポテロにもみられるように、歴史発展の動因を生産過程に機能する要因ではなく市民社会の本質矛盾が隠蔽され仮象形態をとる流通世界における二因子——生活資料と人口をあげ

るにとどまつた。また「近代人口論」者のうち「ブルジョアの生産が革命的なものでなく、歴史的契機でなく、たんに古い社会のより広汎なより好都合な物質的基礎を構成するかぎりにおいてそれを短縮する」(剰余価値学説史第三卷)僧侶、寄生階級出身者が多かつたこと(たとえばマルサス、オルテス、タウンセント等)等々からも人口―食物史観が一定のブルジョアの發展を前提としながらも、むしろそれが「革命的なものでなく、歴史的な契機でなく」寄生階級に好都合な物質的地盤を提供する限りにおいて支持するというブルジョア流通―合理主義―絶対主義的ポピュレイションニズムを批判する限りの合理性―にすぎなかつたことがわかるのである。それならなにゆえ産業資本のイデオログ、リカードウがマルサス人口論を「私がこの書についてもついている——一般的な印象は素晴らしいものである。その学説にきわめてあきらかに、かつきわめて満足に述べられているので、そのためそれは、アダム・スミスの名著によつてうみだされたそれのみ劣る様な興味を私に起させた」(私は今それをこゝに入手し、すべての新しい事柄を再度読み直してみた、そしてつとも卒直にいつでも意見が異なることがみいだされうるのがきわめて少いのに驚いている)と過褒の辭を呈してゐる(Letters of Malthus, P. 107, 144)のか。人口理論一般として事實はリカードウはマルサス説を承認していなかつたこと、承認した事項についても副次的影響条件としてしか考慮にいれていないことについて吉田秀夫「マルサス批判の發展」二三五—二三六頁参照。

(15)近代生物学の確立をダーウインの進化論におくことは、近代物理学の確立をニュートン力学の成立に近代化学をドールトンの原子説に置くのと同様に今日市民権を獲得している。

(16) V. Gordon Child: *History*, 1947, ねす訳書一三〇頁。

(17) 安西文夫「社会学史概説」五五—五六頁。

(18) 自然と歴史的な社会とは無論別の法則性が作用する。それにもかゝらず、この二つの世界は自然史的發展の連鎖をつうじて同一なのである。したがつて社会科学において使用される根本概念が自然科学のそれとけつして直接に同一ではないにかゝらず、「第一次の世界観」(戸坂氏)や「唯物史観の規定性」(原氏)をつうじて相照応しあい移植入観念しあつたり、論理構造的に照合したりするのである。戸坂氏はイデオロギー的前後的な「共軌」よりもむしろ移入前後関係のないたんに純粹論理的に照合する「共軌」を「実質的な共軌」と解され、イデオロギー的共軌に関しては何等語られることがない。私はむしろイデオロギー的な「第一次の世界観」や「唯物史観の規定性」を媒介とする移植入観念——前後関係こそ逆に「実質的な共軌」と考えたい。シュンペーターの一般均衡理論とニュートンの機械論という例にみられるような純論理的

共軛關係よりもむしろオエルネットの電磁氣研究とシエリングのロマン派自然哲学や、マルサシズムとダーウイニズムと
 いう關係にせめされる支配的世界觀―思维方法を媒介としたイデオロギー的共軛關係をこそ重視したいとおもう。尙「共
 軛」Königreichheitの意味内容については紙幅の余裕がないから戸坂潤「現代哲学講話」一〇頁および選集第一卷「科学
 論」(上)一八一―一八三頁参照。

(19) サフォーンフ「変革の生物学」続卷解説二七六―二七七頁(福本日南氏校閲)。

(20) 同上書二七九頁。

(21) 吉田秀夫氏はマルサス人口論における根本的致命的誤謬の一つとして、いわゆる人口原理なるものを樹立するに當つて採
 用した絶対化されたそれ自身の人口とそれ自身の食物との対比關係を基礎視点とするドグマチックな孤立化の方法論をあ
 げておられる(各版対照マルサス人口論、古典經濟叢書、解説三九頁)。このような致命的誤謬をもつ自然的原理としてのマ
 ルサス人口論に向けられた批判は、当然個別から出發する方法の否定におもむいたのであつて、まづサドラアからはじまり
 タブルデイおよびケリーとつづき、ついにスペンサーにいたつて全存在―有機界における動的均衡の強調となり、マルサ
 ス説は生物的原理としてもまづたく否定されてしまつた(吉田秀夫「マルサス批判の研究」一六八―一九頁)。自然的人口原
 理で採用され、したがつてそのまま転用された社会的人口原理においてもみいだされるこの孤立化的方法は横山正彦氏のい
 われるマルサスの「事実と經驗に照して」というその論理実証主義」(經濟評論昭和三十年四月号「經濟学史研究のあり方に
 ついて」二六頁)、平瀬巳之吉氏のいわれる「真理はつねに中庸にあるとするマルサスの常識的な經驗主義」(「經濟学の古典
 と近代」九頁)とも関連して考察したいがいまは措く。ただ日本でもつとも先駆的な形でダーウイニズムを方法論的に考察
 された梯明秀氏の「生物界におけるダーウイン的課題」(物質の哲学的概念)所收)をぜひ参照されたい。こゝではダーウイ
 ンのしめした方法論の弁証法的構造が抽出されており、マルサスの如上の方法論との経緯はあまりにもあきらかである。

(22) 吉田秀夫「新マルサス主義研究」七頁。

(23) Adslf Held ; Zwei Buchen, SS.205-7.

(24) W. Hasbach; Zur Geschichte des Methodenstaates in der Politischen Oekonomie, Schmollers Jahrbuch, 1895. S.476.

(25) Mathus ; Principles, 2. BK. II, Chap. I, Sec. III

(26) 水田洋「近代自然法思想の歴史的性格」「近代人の形成」所收参照。

- (27) 日本評論社版第二版 一一五—一六頁。
- (28) H. Freyer ; *Einführung in die Soziologie*, 1031. S. 88,
- (29) H. Spencer ; *The man versus the State*, II, *The coming Slavery*.
- (30) R. Flint ; *Historical Philosophy in French, Belgium and Switzerland, Edinburgh and London, 1893. P.583.*
- 尙社会対個人なる社会学の運命的な矛盾は、チャタートン・ヒルによつて「無数の世紀を通じて原始時代の神秘的な暗黒にまで遡るこの發展は一つの斗争の歴史に外ならない。この斗争の端緒は人間の最初の集合の中におさめられるものであるがその終結は到底予想され得ないものである。蓋し人間の社会が存在する限り、それは結末を告げ得ぬからである。即ちこの斗争こそは社会と個人との斗争であり、集団と人間との斗争である」と倒錯的に語られているが、ジンメルは悲痛にも社会対個人の永遠の斗いは「原理的に解決し得ないものである」としたのである。資本論の著者はこの永遠の相下の矛盾が十八世紀以降の市民社会の胎産にともなう歴史の所産であることを次のごとく指摘している。「スミスやリカードウがそれをもつてはじめる個々バラバラの獵師や漁夫は、十八世紀の空想でない想像物にぞくする。それはロビンソン物語ではあるが、けつして文化史家の考えるように、たんに過度の醇化にたいする反動や誤解された自然生活への復帰を表現するものではない。それは、うまれながらに独立した諸主体を契約によつて關係させ結合させるルソーの社会契約説と同様に、このような自然主義にもとづくのである。このような自然主義は、大小のロビンソン物語の仮象であり、しかもただその審美的仮象であるにすぎない。それはむしろ、十六世紀以来準備されて十八世紀にその成熟への巨歩をすゝめた市民社会をみこしているものである。この自由競争の社会では、個々人は、それ以前の諸歴史時代に彼を一定のかざられた人間集団にしていた自然的紐帯その他から解放されてあらわれた。スミスやリカードウがまだまったくその影響下にあつた十八世紀の予言者たちは十八世紀のこうした個人——一方では封建的社会形態の解体の、他方では十六世紀以来あらたに發展した生産諸力の産物——を過去に実在した理想として思ひうかべていたのである。歴史の結果ではなく、歴史の出発点として。なぜなら、このような個人は、自然にしたがうものとして、人間性にかんする彼らの表象にふさわしく歴史的に成立したものではなく、自然によつて指定されたものと思われるからである。……十八世紀に『市民社会』ではじめて、社会的連繫の種々の形態は、個人の私的、目的のためのたんなる手段として、外的必然とも個々人に對立するようになる。」(大月書店マル―エン選集補巻3、二五六—六頁)。

〔二〕 日本における自然法と社会有機体思想、民権論と國權論

西欧における偉大な啓蒙の世紀に匹敵するような啓蒙時代が形影なりとも日本には、実存しえなかつたか。いな、いち早く「知識を世界に求め大いに皇基を振起すべし」と誓文した明治政府は、いわゆる「文明開化」の旗幟のもとに分権的封建統治体制の克服、中央集権¹⁾近代国家の急設等の要請にでて、明治十年前後——明治国家の姿勢が暗転するまで、鋭意西欧自然・社会科学の移植入につとめ、澎湃たる啓蒙の風潮は朝野を席卷したのであつて、これ一種の侏儒的、日本型啓蒙時代といえよう。²⁾「一般人民——華士族農工商及婦女子——必ず邑に不学の戸なく家に不学の人はなからしめん事を期す」とうたつたかの有名な「学制」発布にかんする被仰書は、「学問は身を立るの財本」とし修身齊家治國平天下的な封建教学を否定するとともに國富論派啓蒙思想家の圧倒的影響下に³⁾(當時文部省に福沢の影響つよく「三田の文部省」といわれたことをみよ)以後の文明開化政策を決定つけたのであり、この啓蒙の「新風」こそ「朝」より「野」に吹きくだつて、明治十年代に激化した民権運動の糧となつたものである。板垣退助はスペンサーの「社会平権論」を「民権の教科書」としてたゞえ、土佐立志社の指導した酒屋會議の檄文が、スペンサーの「干渉論」(明治十三年訳出)から専制政府の干渉反対を学んだのも、要するに啓蒙時代に受容された渡來自然法思想の一斑を撰つたものといえよう。しかも明治十四年政変を契機とする舞台の暗転、啓蒙時代の終焉は、福沢に代表される國富論派も加藤弘之によつて主唱された國權論派もひとしく御用学の本質を發揮させ藩閥政府の陣営に雪崩れをうつて投入せしめたのであり、これら官許のイデオログに掩護されつついまや官権は民権運動を脱胎せしめ、公然たる攻勢をとりはじめた。民権運動の激化したさなかに官府理論として呼びだされ成立した日本社会学は、自らのブルジョア有機体說的構造を前期的有機体説⁴⁾儒教的忠孝主義と吻合せしめるとともに、森有

礼等の努力により、ここにいわゆる「家族国家」観形成の第一反動期が到来したのである。

ブルジョア有機体説は絶対主義イデオロギーとして国家教育の核心に包攝されていつたのであつて、この期を家族国家観、すなわち絶対主義的觀念構造形成の第一期とし、明治四三年の幸徳事件を契機とする社会主義の「冬の時代」の到来とそれに対応してうちだされた「国民道徳論」を基調としての修身教科書の忠孝儒教主義への再編成、明治四四年におけるそれ等の一応の終了に象徴される家族国家観の第二の本格的形成―反動期を第二期とする。

家族国家観の第一期形成期は明治二十二年の旧憲法発布によつて壮嚴された絶対主義国家の確立⁽⁵⁾を翌年度に觀念的に裝飾した教育勅語によつてほぼ完了したといえるのであつて、ここでは「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス」と國民の内面生活の細微にまで干渉したが、井上哲次郎はその勅語衍義において「国君ノ臣民ニ於ケル、猶ホ父母ノ子孫ニ於ケルガ如シ、即チ一国ハ一家ヲ拡充スルモノニシテ、一国ノ君主ノ臣民ヲ指揮命令スルハ、一家ノ父母ノ慈心ヲ以テ子孫ニ吩咐スルト以テ相異ナルコトナシ」⁽⁶⁾と説いて、家族国家観の第一期形成の教義をときあかしている。⁽⁷⁾

絶対主義が自由民権運動を墮胎せしめてから旧憲法と教育勅語の発布によつて、ほぼ絶対主義の権力的觀念的構築物は整備されるのであるが、とこでこゝにみられたブルジョア有機体説と前期的有機体説との吻合↓家族国家観の形成が絶対主義イデオロギーの整備でもあり、権力内部への有機体説の攝取でもあり、要するに倫理と権力との相互移入であつた事實は注目されてよいであらう。つまり権力の実体が国民道徳の、したがつて倫理性の究極の源泉となつていくのであり、絶対主義国家は政治的権力と精神的權威とを一元的に整備、占有したものと見える。旧憲法発布の翌年、第一回帝國議會の召集を目前にひかえて教育勅語が發布されたことは、絶対主義国家が政治的価値にとどまらず倫理的価値の独占的決定者として君臨したことの公然たる宣言であつて、思想ないし道徳問題は「私事」として権力内容から分離せしめられ、民衆にたいする内面的倫理的支配力ができるか

ぎり技術化―抽象化せしめられ(法体系への移行)、逆にそのことによつて「資本家、地主および富者が自由に平穩に間接に合地に支配」しうるブルジョア国家(立憲君主制、ないし共和制)との異質性を思うべきである(八・一五敗戦後における絶対主義権力機構の解体・再編にともなう、国家と道徳、政治と教育の分離、天皇の神格否定、超国家主義教育宣伝の禁止措置がとられたことをみよ)。このように絶対主義国家に逼る倫理的実体と政治統治の主体との即自的未分離と一元化とが明治国家によつても具有せられていたからこそ(その極北として昭和年代にはいるや思想犯にたいする内面指導にとどまらず、ついに脳細胞の統制にまでのりだしかの「転向時代」を現出したことをみよ)、本来ブルジョア国家においては権力内部から排泄せしめられる筈の教育や倫理がことごとく統治構造内部に吸収され政治的反動と相即せしめられていくのであつて、家族国家観の第一期形成にも第二期形成にもこれらの特徴は遺憾なくしめされる(かの明治思想界を貫流するキリスト教と国家教育との衝突問題の淵源もこゝにある)。石田雄氏がおこなつたように、国定教科書にステロタイプをみいだしつゝ、明治四〇年代に社会主義の冬の時代の到来、家族国家観の本格的形成を追求しうるのは、このためである。⁽⁸⁾

ところで右に述べた第一期反動期が民権論にたいする国権論の征覇、したがつて啓蒙時代の遺物たる自然法思想にたいする有機体説の攻勢を意味していること、そしてこれこそ日本における侏儒的形態での自然法思想対有機体思想の斗いの結末であつたこと、はずでにあきらかである。しかも皮肉にも、スペンサー社会学が角遂する明治国家側によつてその有機体説的構造面を民権運動側によつてその自然法的側面をそれぞれ抽出・利用されたのであつて「スペンサーの二つの魂」は当年の実践場裡においては、ついに早期的に有機体説的魂の勝利によつて終熄せしめられた。ブルジョア社会学有機体説と前期的社会学有機体説との合生、それらの民権運動にたいする挾撃と自然法にたいする攻勢の過程は、市民革命後の古典的西欧社会において、第四階級の脅威的抬頭に直面した市民階級が封建的残存勢力との妥協と抱合とをあえてし、自らの社会学の有機体説的構造を介して前期―封建的社会理論と握手し

たこととけつして同日に語り得ない。なぜなら、西欧社会においては、自然法思想のトレーガーたる独立生産者が前期的有機体説をその政治的背骨たる「後期家産制」(ウェーバー)とともに揚棄したのちに、その後身たる産業ブルジョアジーが第四階級の脅威的抬頭におよんではじめて前述したようなブルジョア有機体説と前期的なそれとの妥協・抱合が成立したからである。

この期に統治勢力がいかにスペンサー社会学の有機体説構造を価値実体として吸収したかは、第一期家族国家観の形成に主導的役割をはたしたかの絶対主義官僚森有礼がアメリカ公使だつたとき(明治三年―五年)、イギリスにスペンサーを訪ね日本の制度改革に関する意見を叩いたのを手初めに、いらぬ憲法草案に欧化人口政策に条約改正に、幾度となく国家の枢機を開被して彼の所見をたづね、かの憲法草案に多大の影響力をもつたロエスレル、シュタイン、グナイスト以上に政府の眷顧をうけていたことからもわかる。⁽¹⁰⁾ 森自身がスペンサーの研究者であつたことは『森先生伝』が、「先生甚だ学を好む、故に公使館に在るや、諸書を涉獵し特に文学倫理の書を研究せり。スペンサー氏、ジョン・スチュワート・ミル氏理財等の如きは、当時一人の注意するものなかりしに独り先生は熱心に之を研究せり」と伝えている。⁽¹¹⁾ 以上におけるように、社会有機体説がスペンサー社会学の明治国家による受容と吸収とによつて、倫理化せしめられていつたのは一の背理もふくんでいないが、他方、明治国家と敵対した民権運動家が一身の内部で前期有機体説の影響をたちきることができなかつたのはいかなるわけか。すなわち民権運動指導家河野広中がミルの『自由の理』を読むにおよんで、「従来有つて居た思想が一朝にして大革命を起し忠孝の道徳を除いただけで、従来有つていた思想が木葉微塵の如く打壊かれ」、奇怪にも儒教倫理―前期的有機体説と自然的思想とを矛盾なく内在せしめたこと。その一因として彼らの民権運動を支えるべき階級的主体―独立小生産者、自營農―シヤコパン派の脆弱性、すなわち自然権思想を受容すべき西欧社会におけるような階級的主体―独立小農民の欠如があげられよう。⁽¹²⁾

ところでスペンサーの自然法思想は軍事型↓産業型なる社会進化論とともに彼の教育論においても顕著に含有されてきたのであるが、それが啓蒙時代に受容されながら家族国家観の形成にともない統治構造内部から排泄されて

いく過程について小倉金之助博士は、「自由民権運動は、教師たちにも、思想的にも大きい影響を与へた。教師の間にひろく読まれたスペンサーの教育論は、知育においてペスタロッチの開発主義、徳育においてはルソーの自然主義を主張したものであるが、スペンサーは進化論の立場から、個性の尊重、個人の政治的自由を力説し、人間にとつて最も価値ある知識は、科学——心理学、社会学などを含めた数学・自然科学——である、と強調したのである。しかしながら自由民権運動が高潮に達したとき、個人的自由を尊重する近代市民社会を喜ばない絶対主義官僚は、自由主義的思想に圧迫を加え、立憲制の施行を目の前にして、かえつて教師や生徒を政治的盲目にする方策をとつた〔明治十四年公衆を集めての学術演説禁止学校生徒の政治的集会・結社の禁止、政務に関する講演討論禁止、教育の政論干渉禁止、明治十九年各種学校令、法制と経済科目の削除、師範教育大改正等——市原註〕……自由民権運動を挫折させた官権は、いまや急速な攻勢をとりはじめた。絶対主義内閣が成立し(明治十八年)『帝国大学会』があらわれ(明治十九年)てから、いよいよ帝国憲法が自由民権運動の屍の上に立てられた。さらに教育勅語が下つてここに絶対主義専制への国民的再編成が基礎づけられたのである」¹⁴⁾と述べておられる。

かくて奇妙にもスペンサーが保有する二つの魂の内部矛盾として約現された・明治日本の自然法思想と社会有機体思想との対決は、ジャコブソンの階級勢力の脆弱性もあつて、早期的に国権的有機体説の勝利に結果し、以降、社会有機体説は権力内部に吸収されたまま絶対主義イデオロギーを形成せしめていつたが、一方、忠孝の義を保有したまま自然法思想に目覚めた福島自由党の指導者や朝鮮の政変がおきると「板垣、片岡の先進、全県の人心を統率し、各社各郡の有志を統べて義勇兵を編成し、昼夜操練に怠らず」という醜態を演じた土佐自由党の幹部が、敵手に屈するはもちろん、明治三十三年に自らを葬るの挙に出て幸徳をして「噫自由党死す矣」の文を書かしたの

も、一の必然であつたともいえよう。かの左派的指導者大井憲太郎ですら「社会に活動の力を与えんとするには外患などを惹起するは殊に良手段として此際に於て実に始めて人民に真正の愛国心というものが起るべきものなり」と朝鮮改革運動に走り、ついに大アジア主義の泥沼におちこんだからには。第一期家族国家観形成期における（ほほ明治二十一年に定型化された）国権論の昂揚が、「民権伸張論を捨てて国権主義に変ずるに至れるなり。民権の伸張大に可し。然れども、徒らに民権を説いて国権の消長を顧るなくば、宣しく、日本帝国の元気を維持せんと欲せば、軍国主義に依らざるべからずとし、国権大に張らざるべからずとし、遂に曩きの民権論を捨つる弊履の如くなりし」⁽¹⁵⁾ 玄洋社を筆頭とする前期的国家主義団体によつてはかられたことはあながち非理ではあるまいが、上来述べたように本来国権論と矛盾・背反する位置にあるべき筈の民権派が（左派、右派の別なく）、民権運動のもつとも昂揚した時点においてすら国権論の影響からのがれえず、家族国家の形成に随伴して排外主義（シヨウワツイニズム）の虜になつていく秘密は何であろうか。その諸原因として、さきに指摘したように彼等を支えるべきジャコパンの階級勢力の缺如や民衆の微温な自然権の要求にたいしてすら牙をむかねばならない絶対主義の本質的性格や、⁽¹⁶⁾ 民権運動家の愚民観・志士意識にみられる半封建的精神構造をあげるの⁽¹⁷⁾は容易であるけれども、われわれは本稿が対象とした日本社会有機体説の生長にとつて至大の促進的役割をはたした国際的環境——帝国主義段階に移行しつつある世界資本主義に圍繞されたまま、ながく不平等条約の桎（し）にながれていたという——を無視するわけにはいかない。⁽¹⁸⁾ けだし国権派も民権派も朝も野も国権立たざれば民権立たず、という基調に馴化されつつ在野のブルジョア民族主義的、もしくは前期的民族主義的な諸運動はひとしく貪婪な絶対主義権力の内部に吸収され、軍・封・帝国主義の政治的観念的内容物とされていったから。さらにこの過程で国権的有機体説は、一方国内の階級的矛盾を隠蔽し、他方帝国主義国家間

の諸矛盾を弱肉強食のロジックにてらして武断的に処理することを合法化し、国内的矛盾を国際的緊張や対外膨脹に転化し「抑圧委譲」するために全力をつくしたから。

ところで、日本における民権論と国権論の上述べてきた運命にとつて、したがつて国権的な社会有機体説の帰趨にとつて劃期的な意義をもつた日清戦争——明治二十七年・八年は、日本の政治経済思想の全域にわたつても重要な転期となつた。徳富の「膨脹の衝突史固より可なり。願はくば日勝清敗の衝突史たらしめよ」との鼓舞のおとまり、「日勝清敗」をかちとつた軍・封・帝国主義は多年の宿願であつた不平等条約改正に着手できたとともに、植民地を割取して一躍後進日本を世界の「列強」に列伍させ、消費財における産業資本を確立せしめ、さらに思想界にも巨大な変貌を与へ高山樗牛をして「本邦政治上の最大事実たると共に、また明治思想史の局面を一変したる契点なり」(明治思想の変遷)と筆致せしめた。福沢や加藤を堵列して国権派に投げこみ民権運動に牙を向けさせた明治十年代から二十二、三年にいたる第一国権反動期が、主に国内における「旧民主主義」運動をめぐる階級対立の帰趨によつて決定づけられ、したがつて社会有機体説も主にこの面において家族国家観に包摂され盛行せしめられたのに反し、徳富と内村鑑三とを転回させた明治二十七年、八年を契機とする第二の国権反動期は後進日本が植民地をはじめて獲得し風雲の急な「絶東の海表」に姿をあらわしたための極東における国際的諸矛盾の激化と緊張関係によつて主に決定づけられ、したがつて社会有機体説も主に国際的側面より鼓舞し繁茂せしめられていつたのである。

自由民権運動の死灰のうえに明治二十年代にかけて進行していつた第一期国権反動のばあいにおいてすら、明治国家はしたがつてそれと膚接する国権派は前代啓蒙期の遺物としての自然法思想——民権論をいまだ保有し国権論に

接合していたのであつて、この期の前期的国民主義を代表する人々——雑誌「日本人」に拠つた三宅雪嶺、志賀重昂、杉浦重剛等は「三千の奴隸を如何にすべきや」（日本人九号）をはじめ高島炭坑の惨状を攻撃し資本家・地主にたいする忠告的態度を持し、政府の勞働政策を批判するところがあつた。⁽¹⁹⁾ 前代の遺物であるにしろ、このような「上流の民権論」の見地よりする啓蒙的自然法思想を、尚一貫して保持したのがかの徳富蘇峯であつて、転向以前——「国民の友」時代の彼は、軍事型↓産業型なるスペンサーの自然法的社会進化觀に立脚して、「軍備擴張論者は徹頭徹尾民党の敵也。朝に在ると野に在るとを問はざる也。民党の目的は不平將軍等の如く大官を増し兵卒の数を増すにあらず……租税の爲めに生れ、租税の爲めに付き、租税の爲めに死せる人民をして彼等自身の爲めに生活せしむるに在り。」との定価な政府↓平民主義論を力調してやまなかつたのである。⁽²⁰⁾ すなわち、以上にみてきたような在野の国民主義的な諸運動（日本主義および平民主義）は着々として進行しつつある絶対主義専制体制の確立・整備と国民の自律的な内面生活や倫理規範の剝奪と権力への吸収・一元化に抵抗し、集権政治の倫理化を意図したものである。約言するとこの期の国権論しがつて国権の有機体説は、民権論の遺物たる自然法思想の殘滓を尙保有しそれを媒介せしめていたといえよう。

ここに明治二十七八年の役が到来する。——十年前には民権運動の戦陣にまみえた絶対主義を、開戦前夜にいはやく日本はアシアの盟主なり「亜細亞に於てモンロー主義の實行を宣言す」⁽²¹⁾べしと鞭撻して憚らなかつた自由党の党報は、開戦後戦勝の声のどよめくなかで「我旭日章を比馬拉山の頂上に樹て覇を東洋に称し、世界の諸雄國と競争場裡に馳聘」⁽²²⁾すべきであると述べ、わが國は戦勝の暁には世界いたるところにおいて「光榮を有する國民」「独立文明の國民」として遇せられ、「東洋の覇權を握る國民」として尊重されるであらうから、「我は則ち

此機会に依て東洋のバランスを支配して、樽俎の間優に世界列国に雄視するに足るの地位を成す可き」である(23)と憶することなく論断したのも効なく、戦勝の獲得物として辛うじて手中におさめた遼東半島が露仏独三国の干渉によつて還附のやむなきにいたるや、ここに前代の後期に抬頭した前期的国民主義とは異なる国粹主義が激しく朝野に瀰漫してきたのである。すでに前稿で日本人口論の原型として考察した徳富の『大日本膨脹論』は、開戦後の時潮にのつてマルサス説と社会有機体説との赤裸々な結合による粗野な社会ダーウィニズムの主張をふくんでいたのであるが、さらに戦後の遼東還附の一事は彼のふるき日の合理主義的国際政治観——「今や人ヲ損スルハ己ヲ利スルニ非ズ、己ヲ利スルハ即チ人ヲ利スルナリトノ主義社会ニ勢力ヲ有スルニ到ル。誰レカ茲ニ到リテ復タ腕力主義ノ味方トナルモノアラシヤ」(将来之日本、明治十九年)と言説した国民の友時代の平和主義と利己主義との共存論と腕力主義排斥論をみよ——を一擲せしめたのであり、「予は不肖ながら家学を承けて……道理は最大有力者にして、道理の向ふ所、天下に敵なきを教へられたり。予がスベンサーやマンチェスター派の感化を受けたるも、要するに此の素地ありしが為めのみ。然るに思いきや、道理が不道徳に、見事に打負けたる実物教育を眼前に於て見せしめられんとは。」「此役以来は、最早自力にして立つ以外には、何等の方便もなきこととなれり」(時務一家言、緒言)と公然とマキャヴェリズム宣言をおこなつたのである。蘇峯の内部におけるスベンサーの二つの魂の葛藤はいまや自然法的社会進化論(軍事型社会↓産業型社会)の棄却によつて、さらに有機体説とマルサス説との吻合によつて決着したのであり、彼のこの「転向」は程度の差は問はないとしても日清戦後における福沢や中江兆民における国権論への急傾斜、また樗牛の国家の紐帯を「精神的教化」よりはむしろ「実権」にもとめ「国家と国民との関係は、即ち實際上全く権力関係に外ならず」(我が国体と新版図、明治三十年)とする権力主義的な国家観と符節を合し

たものであつた（山路愛山が帝国主義を説くにいたるのもこの時期であつた）。臥薪嘗胆の国民的氣運にのつてあらわれた樗牛や木村鷹太郎らの「日本の實力に目覚めた日本主義」は前代のそれが勞働者にたいしてもつたような同情的態度はもはや微塵もみられず天皇を神格化し言論の自由を否定し植民地にたいする帝国主義的政策の大胆な公言がなされていた。⁽²⁴⁾ 個人の自由や独立意識に媒介されない国家主義の抬頭と、一方自然権の要求をふくまない「逃亡奴隸」⁽²⁶⁾的な「恋愛を歌ひ、星と董花を詠じ、唯自己の欲望を満足するものを以て理想とし、国家の存亡を見て念とせざる個人主義」を生じたのである（山路愛山「現代日本教会史論」⁽²⁷⁾）。かくて明治初年啓蒙時代に主張された個人の自由や独立に支えられた国家自立や発展の展望は消失し、民権論や啓蒙自然法思想の最後のな葬送——それを受容する新らしい階級勢力の抬頭⁽²⁸⁾——とともに、変革的ナシヨナリズムの一分子すらふくまない粗野な帝国主義の讚歌が朝野を覆つたのであり、この情を直視した幸徳秋水は「廿世紀の怪物帝国主義」（明治三十四年）をあらわし、侵略主義と軍国主義を批判したが、中江兆民もまた「一年有半」（明治三十四年）で「今の政党家皆云ふ、民権は陳腐なり、人民の輿論に非ず、帝国主義は新鮮なり、人民の輿論なりと、人民なる者果して椅子の分捕を輿論となせる乎、今の政党家は、人民の財布の盜賊にして、又輿論の盜賊なり⁽²⁹⁾」と軍国主義的世論の作製を難じた。——「英国は南阿を伐てり、米国は比律賓を討てり、独逸は膠州を取れり、露国は滿洲を奪へり、仏国はフアツシヨダを征せり、伊太利はアビシニアに戦へり。是れ近時の帝国主義を行ふ所以の較著なる現象也⁽³⁰⁾」、このように世界資本主義は帝国主義的征覇戦にむかつて巨歩をすゝめつゝあつたが、同時に「鉛細工的」日本帝国主義もまた極東の支配權をもとめて急速に生長しつゝあつた。すでに明治三十三年義和団鎮圧のため列強帝国の連合軍に参加した日本は極東の憲兵としての実を遺憾なく發揮し⁽³¹⁾、国内ではこの年、選挙改正と伊藤博文の政友会創立に止めされるブルジョ

アシーと絶対主義との新たな同盟を実現し(彼等の治安警察法制定をみよ)、これら内外二重の新たな事態の基礎条件として産業資本主義―確立期の到来(明治三〇年宮原式汽罐創製、同三十一年常陸丸竣工、同三十二年大冶鉄鋼買入〔植民地鉄鋼確保等々〕と財閥的独占の完成とがあつたのである。

このように、日清戦争、三国干渉以来の国際的環境とりわけ「盛んなる哉所謂帝國主義の流行や、勢い燎原の火の如く然り」といわれた世界的潮流のさなかで、社会有機体説がその戦斗的魂をもつてふたたびマルサス説と吻合し「軍人的空威的」日本帝國主義に遺憾なく協力の実をしめたのに不思議はない。われわれは次に、「我國民を膨脹せしめよ、我版圖を拡張せよ、大帝國を建設せよ、我國威を發揚せよ、我國旗をして光榮あらしめよ⁽³²⁾」という第一の、大日本膨脹論を考察するとともに、これにたいしはじめて公然と立ちむかい、あわせて日本人口論批判の一章をもくわえ得た幸徳秋水の帝國主義批判の内容をも追求してみたい。

本稿がはじめに考察したマルサス説と社会有機体説の共軛關係、および社会有機体説と自然法思想との日本的形態における早期の對抗關係は、続稿における考察を俟つてはじめてその全姿において解明される筈である。

註(1) 永田広志「明治初年の啓蒙」(選集第五卷) 八五頁以下参照。

(2) 國民教育奨励會編「教育五十年史」二八頁。

(3) この日本における啓蒙時代が徹頭徹尾絶対主義政府の首導によつたといふことは、そこで受容された自然権思想をいちじるしく限界づけた。たとえば加藤弘之は明治七年の「国体新論」で天賦人權論を述べているが、そこでの彼の啓蒙自然法思想は政治の目的を「安民」に置くべきことを統治者にもとめ懲瀆するという程度のもので、到底下からたゞかいはるべき性質のものではなかつた。

(4) ブルジョア社会有機体説がそのまゝ矛盾なく前期的社会有機体説―儒教倫理と合生しうる筈はなく、家族國家觀の形成にともないブルジョア有機体説に重心を置く森有礼と儒教倫理に重点を置く待講元田永孚との間に対立が生じ、この矛盾

は結局絶対主義国家形態が止揚されない限り続くべきものであつて、明治末年の本格的な家族国家観の形成期においてもついに克服しえない。

(5) 「日本農業の基本型〔半封建的土地所有制・半隷農的零細農耕〕は——軍事的半封建的日本資本主義の基底として、又、国家の基本法〔欽定憲法〕の構成——階級規定の本来の基礎として——地租改正を基調に構成せられ、略々明治二二—二三年頃、固定的形態をとるに至つた事情」については、山田盛太郎「農地改革の歴史的意義」(戦後日本経済の諸問題、所収) 参照。

(6) 井上哲次郎「憲法行義」(明治二四) 上巻一〇頁——これは教育勅語の官許版行義である。

(7) 家族国家観を核心とする絶対主義イデオロギー批判については、永田広志「日本絶対主義のイデオロギー」(社会評論第三卷第三号) 参照。

(8) 石田雄「明治政治思想史研究」一七頁参照。

(9) 憲法制定事業がプロシヤ国家有機体説の支持のもとにおこなわれたことはいうまでもないが、それに参画して大きな役割をはたしたかのロエスレルについては、ジームス教授は彼の反自然法斗争的態度について、「前世紀の自然的、観念の支配に対する斗争、すなわちまた啓蒙期の自由主義思想に対する斗争は、ヘルマン・ロエスレルの学的著作ならびに彼の日本における国家政治的活動を特徴づけているのである。啓蒙期の経済・政治ならびに文化的意義においての自由主義の影響は、ロエスレルにとつては、人間の存在の財の破壊過程であつた。ロエスレルは前世紀の中葉における自由主義の学的反對者中の一つの地位を占めるものである。」(鈴木安藏「憲法制定とロエスレル」二七頁)。

(10) 牧健二「明治時代における西洋人の日本社会観」(開國百年記念「明治文化史論集」所収) 二二三頁以下参照。

(11) 木村匡「森先生伝」一八頁。

(12) 下山三郎「福島事件覚え書」歴史評論二六号、井上幸治「秩父事件」同号、後藤靖「飯田事件」人文学報二号等の自由民権運動にたいする最近の新しい研究成果——ジャコブンの要素の貧弱さの指摘をみよ。比較史的にいえば、日本にあつてはいちおうミルやスペンサーの自然法思想を受容し得る主体が脆弱ながらも形成されていた点、それを受容すべき階級の基盤をほとんどもたなかつた旧中国と異なるが、しかも、その階級的地盤が「旧民主主義」革命を遂行できるだけのジャコブンの階級的剛強さをもたなかつた点、あきらかに西欧社会とも異なつていた、といわなければならぬ。念のため

めに「新民主主義論」中の興味深々たる一節を引いておく。——「『五・四』運動以前においては、中国文化戦線の斗争はブルジョア的な新文化と封建的な旧文化との斗争であつた。……当時の学校とか、新学とか、あるいは西洋の学問とかいつたものは、すべて基本的にはブルジョア的な自然科学であり社会科学であつた(基本的にいうと、そのなかにはまだ多くの中国の封建的残滓が混入していた)。敵復によつて紹介されたダーウインの進化論、アダム・スミスの古典経済学、ミルの形式論理学およびフランスの啓蒙学者モンテスキュー一派の社会論などをその代表的なものとし、それに当時の自然科学を加えたものが『五・四』運動以前のいわゆる新学なるものゝ支配的な思想であつた。当時における支配的な思想であつた。当時において、これらの思想は、中国の封建的思想とたゞかう革命的な役割をもつており、古い時代の中国ブルジョア民主主義革命に奉仕するものであつた。しかし中国ブルジョアジーが無力であつたことゝ、世界がすでに帝國主義の段階にはいつていたことによつて、このブルジョア思想は、数回のうち合いをやつただけで、國際帝國主義の奴隸化思想と中国封建主義の復古思想の反動同盟軍によつて撃退されてしまつた。……『五・四』運動以前の、中国の新文化運動、中国の文化革命は、ブルジョアジーによつて指導され、かれらはまだ指導力をもつていた。『五・四』運動以後になると、この階級のもつ文化思想は、かれらの政治的思想よりもはるかに立ちおくれ、指導的役割をはたすことがまづたかできなくなりせいぜい革命の時代においてある程度同盟者になり得ただけで、その盟主としての資格はプロレタリア文化思想の肩にかゝつてこないわけにはいかなくなつた。」(「新民主主義論」中研訳論文集、一一三頁以下)。

(13) スペンサーの自然法思想については、ひとまづメンツェルの「スペンサーの主著すなわち多くの政治的社会的な論文において、これらを細微に考察すると、彼は自然法の確乎たる一信奉者としてあらわれる」との批評(A. Menzel, *Naturrecht und Soziologie*, 1912, S. 41)をあげておこう。またスペンサーの教育論は市橋善之助訳、高山書院、昭和二十二年がある。因みに本書の序文はいう、「スペンサーの『教育論』を訳したといつたら、或は古臭い戯の生えたものを訳したと思われる方もあるかも知れぬ。なる程こゝに訳出した『教育論』は一八六一年に初めて出版されたものだから、今日から数えると八〇年前に出版されたわけである。一八六一年というと、孝明天皇の御代で実に文久元年のことであり……ロシア皇帝が農奴解放を布告された年である。」

(14) 小倉金之助「われ科学者たるを恥づ」現代随筆全集第二五卷六四頁以下。またルソーやスペンサーの自由主義教育思想に対抗して政府は鋭意ドイツ、ヘルバルト教育思想の導入につとめ、以後十年間にわたつてわが国教育界に君臨せしめた。

ヘルバルトは教育の目的を倫理等にもとめたのであるが、これらの詳細は山下徳治「教化史」日本資本主義発達史講座第二部所収一九頁以下、および飯島篤信「教育史」九九頁以下参照。

(15) 玄洋社史(大正六年)四〇八頁。

(16) 「帝國主義論」の著者は絶対主義国家形態の特質を立憲君主制、共和制形態と比較して、(1)人民の全くの無権利(2)警察・軍隊・官吏の人民にたいする絶対的権力(3)大ブルジョア大地主のみの審議権、をあげているが、これら絶対主義の本質的諸特徴の日本的形態をノーマンは次のごとくみごとに俯瞰している。「一八八〇年代の初期自由民権運動が警察力と政府の謀略によつて完全に破壊されて以来、日本人民の民主主義的圧力はおそらく一九一八年―大正七年の米騒動―これは効果的指導力をもたなかつたが―の時期を除いては、一九四五年八月の降伏までは、一度として効果的に發揮されたことはなかつた。専制寡頭勢力が意のままに驅使する強力な官僚機構、超国家主義者の悪質な宣伝のため至められ盲目にされた人民の政治感覚、また週期に循環する対外武力侵略による社会不満のある程度の解決もしくは警察的暴力政策による不満表明の圧殺。……日本の戦争製造業者は破壊すべき強力なる民主主義運動もしくは労働運動をもたなかつた」と(*Herbert Norman: Japan's Emergence as a Modern State-Political and Economic Problem of the Meiji Period, 1940*, 大窪訳二七頁)。

(17) 民権運動家の前期的精神構造を分析したものととして、羽鳥卓也「近世日本社会史研究」参照。

(18) 幕末の日本が「半」植民地化の危機にあつたことは今日定説となつてゐる。さらに維新によつて成功裡に民族国家を形成してのちも、明治四四年治外法権を最後のにふりすてる迄は対外不平等条約下におかれて来、したがつて民族の完全独立の国民的衝動が軍・封・帝國主義の進出とからみ合つていたことは事実である。しかし維新以後は、この条約改正と完全独立問題を残しつつも西欧帝國主義の民族的脅威の重心はいちおう極東の風波、とくに対清問題をつうじてのそれに變化してきたのであり、東洋の隸属・植民地国にたいするわが国の宗主権や生命線の問題として民族的危機感情を刺戟する方向に移つてきたのである。――社会有機体説の滲透もこの面をつうじて盛行したのであり、たとえば後述する北一輝の早熟的な国家社会主義への傾斜もこの側面からの風化作用にもとづく。

(19) 平野義太郎「明治中期における国粹主義の抬頭、その社会的意義」思想昭和九年五月号七一頁以下(「ブルジョア民主主義革命」所収)。

(20) この蘇峯の主張は当年にあつて出色のもので、国権も民党もひとしく民力休養を叫びながらも一方国際的緊張感から軍備拡充の要を力説しこれを第一義としていたのであつた。この種の徹底した平民主義は彼の転向後にはもつぱら反戦論者——社会主義者幸徳、木下尚江等にゆずりわたされたのである。尙「転向」の語義については本多秋五「転向文学」(岩波講座文学(5)所収)二六頁以下参照。

(21) 自由党報、二十七年七月二五日論説「我邦は亞細亞に於てモンロー主義の實行を宣言すべし」(森本駿)。

(22) 同党報、二十七年八月二五日論説「日清事変の終局を論ず」(梅田又次郎)。

(23) 同党報、二十七年八月二五日「時事」欄。

(24) 丸山真男「明治国家の思想」(歴研「日本社会の史的究明」所収)二一五頁以下。

(25) この期に導入されたヘルバルト派教育学ですらその個人主義的性格が不適合とされ、代りにもつとも国民主義的なナトルプ・ベルグマンの教育学が官許のもととされるにいたる。またこれらの過程は文学史的にいえば、明治二十年代における透谷、逍遙、二葉亭によつて成立した「近代的人間」の、三十年代にはいつて樗牛の「美的生活論」や晶子の「みだれ髪」にせめられる「本能的人間」えの変貌、さらに日露戦争後の田山花袋の「露骨なる描写」なる形の「自然的人間」の再出發につらなつていくのである(やがて「耽美的人間」の生誕)。くわしくは瀨沼茂樹「近代日本の作家と作品」参照。

(26) 伊藤整「日本文壇史」さらに「近代日本人の發想の諸形式」思想一九五三年二月号参照。

(27) 松本三之介「明治思想における政治と人間」思想一九五四年十二月号参照。

(28) 民権運動時にスペンサーの二つの魂の内部の矛盾としてせめられた有機体説(『国権論』と自然法思想(『民権論』との対立関係は、日露戦争時にいたつて七博士の主戦論と社会主義者を中心とする非戦論との対立として尖鋭にあらわれる。因みに平民新聞第四七号は内村鑑三の「余が非戦論者となりし由来」を掲載しているが、そこでは「非戦論者になりし由来」の一つとしてスペンサーの自然的、社会的、進化的影響があげられており、さらに同第三六号の「世界之新聞」欄では「スペンサー門下の社会党」と題して次のごとく報じている。——「アレン氏は記して曰く、スペンサー氏は一八九〇年頃、レセントパークに卜居せられし時分より従来政治上の意見を異にせし人々と相合ふに到り同時に其信任せし多くの信仰者と相離るゝに到りたりき、而して其門下との間に置かれし一大障礙物は即ち社会主義なりき。……而してス氏が平生最も親愛囑望せし二人の門人が亦社会主義者となりしは、彼に取つての一大打撃なりしが如し、其一人は即ち今のシドニ

1・ウエップ夫人にして他の一人は即ち予(アレン氏)なり……(1) スペンサーの爲めに深き感化を受けたる人々は今や大抵社会主義者たる事、即ちス氏の理想の發達は論理上社会主義に帰着すべきものなる事、(2) スペンサー氏は其初年に於ては王党軍備党をば好戦者にして個人主義の敵なりとして攻撃せしに老年に到りて却つて之が同情を期待するに到りし事、如此にしてス氏の末路寂寥なりき、其親愛せる門下生は社会主義に趨り其所謂『個人主義』を同じくする者は階級制度、軍備制度の味方として彼を苦しめたれば也々と、我日本に於てもスペンサー氏著書の感化を受けたる者多し而して彼等は將た何の状に在りや」と(史料近代日本史・社会主義史料「平民新聞」(三) 八四—五頁)。平民新聞はスペンサーの自然的魂がフエビアン社会主義に接種されたことをしめし、日本におけるスペンサーの徒に非戦と社会主義と呼びかけているのである。ところで日本型「旧民主主義革命」運動として一敗地にまみれた民権論「自然法思想が新しく社会主義勢力に批判的に受容されるとともに、日本のスペンサー学徒にたいし訴えがなされているのはいかなる意味をもつのであろうか。本稿(1)において例証してゆきながらも省略した「ブルジョアの宇宙主」イングランドにおける新しい階級斗争段階における自然法思想と社会有機体説との対抗——自然法思想を受容すべき階級的トレーガーの交替について述べることによつてこのことはあきらかとなるであらう。既述したように自然権「労働收益権」と「土地」労働の理論」をもつて、絶対主義的・半封建的收奪に抵抗してきた独立生産者も、リカードウ「マルサス段階にその後身たる産業ブルジョアジーに孵化し終え、封建遺制、旧帝国主義に対する斗争的市民科学としての経済学にまで下降することのできた彼等の社会体制(—歴史) 認識は飽満せしめられ、ベントムの自然法批判と功利主義哲学の建設、マルサス「ゴドウィン論争以後の俗流経済学のそれによる基礎づけ、マルサス人口論による「土地」労働の理論」の撤去が進行していく。この過程は同時に自然法思想の階級的トレーガーの交替を意味し、自然法哲学は斗争的市民科学とくに古典経済学の基礎づけから一転、トーマス・ペインを境にしてゴドウィンに代表される初期共產主義の基礎づけの方向をたどることとなる。かくてロック、スミスの自然権「労働收益権の思想はリカードウ派社会主義(トムスン、ホヂスキンをみよ)やフランス社会主義(ブルードンをみよ)の思想とともにマルクスの科学的社会主义の成立過程に剰余価値論として批判的に攝取されたのである——アントン・メンガーのマルクスの剰余価値論が全部トムスンからの借物なりという指摘(アントン・メンガー、森戸訳「全労働收益権史論」一七八—九頁)、これに対し資本論第二巻序文におけるエンゲルスの応酬をみよ——、かゝる意味において「マルクスの自然法思想」なる表現も可能となる(水田洋「近代人の形成」一九頁)。かくして西欧市民社

会における階級分裂化の新段階をしめす一九四八年革命、その反映たる古典経済学の俗流化過程にうみだされた「マルクス・アゲインスト・ミル」なる対抗は(杉原教授「マルクスのJ・S・ミル批判」経済論叢第七一巻三号参照)、ミルがコソントの社会学に傾倒しつつイギリス社会学の学問的形成に着手したという意味において(一八四八年「演譯的及び帰納的論理学の体系」中における社会学の学問的方法づけをみよ)、上述した限定された意味における社会学有機体説と批判的に継承された自然法思想との対抗を示現しているといえよう。ミルがのこした社会学の体系的構築の仕事がスペンサーによつてはたされた限り(一八五〇年「社会静学」、一八六二年「第一原理」等々)、当然「マルクス・アゲインスト・スペンサー」なるシエーマもまた設定できるのである。スペンサーが尙自然法思想を含有せしめていた限り、異端のスペンサー主義者がそれを媒介にして、フエビアン社会主義に「進化」し得たことも事実であり(さきの実例をみよ)、他面日本の条件のもとで比類なく盛行したように俗流社会主義者が自ら内在せしめていた社会進化論を媒介として国家社会主義に続々引導されていつたのも続稿に述べるところであり、これらは「マルクス・アゲインスト・スペンサー」が自然法思想と社会学有機体説の媒介関係によつて不断に相互移入し得る可能性をしめしている。このように考えるならば、日露戦争の後において、自然法思想——旧民主主義陣営↓社会主義陣営——と社会学有機体説とが激しく対立しながらも前者が俗流マルキシズムとして内在せしめている社会ダーウイニズムを媒介にして国権論、国家社会主義に続々「転向」していつたこと(北一輝、矢野竜溪、山路愛山等々)、また逆に内村鑑三のように旧来の主戦的国権論を擲ちスペンサーの自然法的社会進化論を媒介にして反戦論者に「逆転向」した事例もあり得たことがあきらかとなるであろう。さらに例示すれば、内村はもちろん秋水さへも凌ぐ徹底した非戦と天皇制批判の立場に立ち得た木下尚江は、軍備自体、「軍事型社会」自体を全廃せしめようとしたのであるが、しかも彼が学校時代以来もつとも強く影響をうけたのは実にスペンサー、とくにその「第一原理」であり、彼は自分の土台は殆んどスペンサーで次にヘンリー・ジョージの「進歩と貧困」の影響をうけたといつていたのであつて、こゝにも木下の一身の内部でスペンサーの自然法思想とフエビアン社会主義との如上の意味における共軛性が体现されていたのである(世界三〇年六月号、木下尚江座談会、一三〇頁、柳田泉氏の發言参照)。

(29) 中江兆民「一年有半」四一頁。

(30) 幸徳述「廿世紀の怪物帝国主義」岩波文庫版一五頁。

(31) 井上清「帝國主義の形成」(歴研「近代日本の形成」所收) 一二三頁以下は一九〇〇年を日本帝國主義化の劃期とされ
ている。

(32) 山田盛太郎「日本資本主義分析」二二四頁。

—(続)—